スペクタクル

みうら結衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スペクタクル

【Nコード】

N13230

【作者名】

みづら結衣

【あらすじ】

高校に入学したばかりの秀才男子が、入学式当日にある新種の病にかかる！残る命はちょうどあと3年。そのタイムリミットと共に、秀才人生は狂い果てていく。

prologue

パイプイスにひたすら座り続け、もう1時間経つ。

中では退屈、外では緊張という表裏の感情が交差する。

それを直すようにメガネを直す。

体育館の子窓から溢れる日の光がレンズに反射する。

現在、僕にとって高校の入学式中だ。

正直あくびをしたいくらい、どうでもいいことだが。

そう。僕にとって中学も小学校も、同じようにどうでもいいものだった。

だからどうせ、高校も変わらないだろう。

テキパキとケジメのある、一人ぼっちの勉強生活が、また始まるだけだ。

いつの日も繰り返し同じ。成績と自分との戦いの日々。

高校の入学式とは、それがあと3年で終わるといふ儀式。

やはりどうでもいい。

僕は今、そんな儀式の最中に在る。

01・血でも睡でも吐いておけ

今まで自分なりにマジメに生きてきたつもりだ。

しかし、さすがに今日は眠すぎる。

今にも思わずあくびが出そうだ、口が押さえるのを何度も堪えた。

あと少しの我慢だ…あと少し経てば、式は終わる。

眉間にしわを寄せつつも、ピシッと正しい姿勢で、僕は固いパイプイスに座り続けた。

と

「うっ　　ゲホッ!!」

!?

なんだ？

「ゲホっ、うえっ　　」

咳が止まらない！

どうでもいい式とはいえ、こんなときに風邪に!?

周りの新入生たちが、一斉に自分に振り向きだす。

ざわめくほどではなかったが、先輩たちも先生たちも、こちらを振り返る。

みんなして野次馬かよ！

「ガハツ…！！」

これは 冗談だろう…。

咳の治まらない口を押さえていた手のひらに、べっとりと吹きかけられた赤い液体。

吐血つて（笑）…結核じゃないんだから。

え？結核！？

手のひらを見つめたまま、途端に青くなる表情。

ただただ視界の真ん中に映る、血のついた自分の手が、暗く霞んでどんどん見えなくなつた。

そして完全に真っ暗になり、意識をなくす寸前の瞬間

おそらく新入生と思われる一人の女生徒の、短い悲鳴が聞こえた。

こんなどうでもいい日に、こんなどうでもいい事になるなんて。

僕が、どうでもいい存在だからか？

02・己は不知を楽と語る

「今日はもう帰りなさい」

保健室。

体温計に記された、39度を越した僕の体温を見て先生は言った。

「そうします。入学初日からお世話になってしまつてすみません」

「そんなに改まらなくていいのよ、もうここの生徒なんだから」

メガネの奥で目を伏せる。

さすがの僕にも、恥という感情はある。まさか入学式中に倒れて気を失うなんて…。

先生は少し笑い、体温計をケースにしまう。

「お家の人に連絡入れてくるから、待つてて」

「あ、はい、すみません…」

「ふふ、誤つてばかり。肩の力抜きなさいね、裏野修守うらのしゅうまくん」

「！」

今日初めて出会つた先生に、今初めて名前を呼ばれ、なんとなく黙つてしまつた。

先生が保健室を出ていくのを黙って見送る。

未だクラクラする頭も、一人になれば少しは楽になった。

肩の力を落とせ、か。

今までも何度かそう言われたことはある。

僕はほとんどの規律を守っているつもりだ。集団行動は苦手だが、勉強だって人並みにはしている。

それに、自分から他人に話しかけることは多くないが、言葉づかいも気をつけてる。身だしなみも。

ただそれだけの、ごく普通のことなのに、周りはそんなに僕がカタく見えるのか？

そついう周りがユルいだけだったりするじゃないか。社会は劣化してる。

今一度真剣に考えてみたが、自分ではよくわからなかった。

それにしても、僕が気を失ってここに運ばれて、どれだけの時間が過ぎたのだろうか。

校舎内には人の声もしなければ気配も、音もない。まだ式は終わっていないようだ。

「お母さん、これから迎えに来るって。帰る用意しときなさい」

澄んだ声にハツとして横を見れば、ドアの傍で先生が微笑んでいた。

「はい…有り難うございます」

立ち上がり、座っていたイスから軋む音がした。

その微笑みの横を通って保健室を出れば、先生の白衣から微かに香水の匂いがした。

わざと目を合わせないようにしてその場を去り、荷物をまとめるため、僕は教室へ向かった。

03・思考回路は交差する

「本当にすみません、入学早々…」

僕と同じようなことを口にするのは、車から出てペコペコと先生に頭を下げる母だった。

原因は不明だが何らかの病気で倒れ、これから早退する僕を迎えに来たのだ。

高熱により、面倒を見てくれていた保健室の先生が、母に「いえいえ」と笑い首を振った。

「もうこの子ときたら…本当申し訳ありませんでした。ほら、行くよ修ちゃん」

母が僕の背中をポンと押す。僕は先生にペコリと一礼し、車に乗った。

その場を後にする車の窓から振り返れば、微笑む先生がどんどん遠く離れていった。

「あのさ、家の中ならまだしも、先生とか他人の前で『修ちゃん』とか呼ぶのやめてもらえる？」

先生の姿が見えなくなったところで、いききに嫌な顔をして母に言った。

母はそんな僕の顔をバックミラーで確認もせずに、きよんととして

返す。

「ええ、何で？昔からずっとそう呼んでるんだから、仕方ないじゃない。修ちゃん」

「やめろって言ってるだろ。僕だって成長するんだぞ、歳を考えてほしいよ」

「16なんてまだ幼いから大丈夫よ。それともマザコンとか誤解されるのが嫌？」

「正直言つとそれが一番の理由…ていうかハッキリ言わないでほしかったな…」

くだらないことで言い合いをしながら、ふと母が言う。

「かかりつけのお医者さんがいらっしやるからねえ、その人なら多分予約なしで診てもらえるし」

「…え？あ、何、これから病院行くの？家に帰るんだと思ってた」

「何言ってるの！39度もあるんでしょ、電話で先生から聞いたわよ。」

(ていうか倒れたって時点で確実に病院行かないと駄目でしょうが)

「…それもそうか」

そんな流れで、僕は母とともに近くの病院へ向かうことになった。

それに対しての嫌な気持ちは僕にはなかったため、特に抵抗もなしに。

まあ高校生にもなって病院が苦手な奴なんていないか。

メガネを拭き息を吐く。このときの僕は、あくまでこれから診てもらう医者信用していた。

普通の医者だと思っていたから、あくまでこの時は信用していた。

ごく普通の、医者だと思っていたから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1323o/>

スペクタクル

2010年10月9日17時09分発行